

Title	森耕二郎著 リカアド価値論の研究
Sub Title	
Author	三邊, 金蔵
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1926
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.20, No.3 (1926. 3) ,p.405(137)- 409(141)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19260301-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

究者も亦畢竟地理學者でなければならぬのである。又他面から之を見るに地上至る所に於て地球の自然は經濟に其の道を指示し且つ至る所に於て經濟的人間は土地の特質を變ずるものであるからして、何人とも一國土の純然たる自然科學的地相を指摘する事は出來ないのである。故に又地理學者は總て經濟的事象を理解しなければならぬ。就中經濟地理學の領域に自ら其の研究を進めんと欲するものは經濟に關する専門學者でなければならぬのである。

實に此點に於て經濟地理學の研究は二重の困難に遭遇するのであるが、又同時にそれは甚だ重要な任務を有するものと言はなければならぬ。而してそれは二箇の分離せる、且つ相互に努力する専門科學の結合を取扱ふものであるから、其等の體系及び研究方法の結合の中に自ら之が解決手段が見出されるのではなからうか。斯くて Schmidt は次の如く結論して居る。「其處には方法手段即ち地理學的方法があり此處には道具即ち經濟的概念がある。而して製作者は未だ之に慣熟して居ない。故に此の基礎の上に正に融合統一がなされねばならぬのである。」(Einleitung. S. 1-4. S. 172)

新刊紹介

森耕二郎著

リカアド價值論の研究

岩波書店發行

定價參圓五拾錢

本書は著者が「リカアドはその價值論を如何なる意義に於て主張支持し、それを以て諸經濟現象の本質を如何なる程度に於て闡明す可く成功したであらうかを見定めんと志し、それについての様々の解釋批評を顧みつゝ、それをかなり包括的に徹底的に研究して見ようとした」其成果に外ならぬいと稱せらるゝものであつて、緒論本論結論の三部門に分れて居る。就中緒論はリカアド價值論の重要と批評の諸態度と目的とを論じたものであつて、著者はリカアドが純粹なる勞働價值説を成形發展せしめたるのみならず其が現今の資本家的社會に於ける交換現象に妥當するものと爲したる點及び其を基本原理として總ゆる經濟現象を説明せんとしたるより經濟學を一つの科學に推し進むるに至りたる點等を擧げて第一の主張を立て終り、次にリ氏價值論に對する諸家の解釋批評には是を勞働價值論に外ならずと解して反對するものと、マーシャル、デイチェルなどの如く折衷的立場より是認せんとするものと、リカアドの如く表面的皮相的に祖述せんとするものと、リ氏價值論の未熟なる點を補正しつゝ、是を生長完成せしめんとするものとの四つありとなし、是等の中何れが最もよく肯綮に中れるものなるかは本論に於て吟味せんとする所であると言つて居る。

リ氏價值論の目的に關しては著者は其が分配論に在ることを指摘したる後に於て「斯様にリカア

ドに在りては彼の價值論は重要であり、そうしてそれは彼の全經濟理論の論理的出發點とせられてゐるのであるが、しかし彼の分配論を論ずるものにしてこの二者の密接なる關係を顧みることによりその本質を理解しやうとするものが殆んどない」としてデードやドッニスガリ氏がマカロツク宛の書翰に於て「要するに地代勞賃利潤の大なる問題は全生産物が地主資本家勞働者の間に分配されるその割合を決定することから際せられねばならぬを以てそれは價值論と本質上密接なる關係はない」と云へる言を引用してリ氏の價值論より分配論を引離さんとするを論難し、リ氏の此言は「價值論そのものは分配法則そのものではない」と云はんとしたものであらうと解しながら初めの主張を支持して居らるゝ。而して是と共に緒論は終るのであるが此最後の點は恐らくは世人の非難を少しも容れざる程に強固なるものではないであらうと筆者は私かに考へつゝあるのである。

閑話休題、著者は本論を三篇に大別し第一篇に於てはリ氏價值論の研究對象並びにリ氏價值法則の妥當限界等を述べ第二篇に於てはリ氏價值論の修正を論究し第三篇に於ては地代論勞賃論利潤論等を價值論との關係に於て説いて居る。而して其所論の大意は先づ第一章に於てはリ氏價值論の研究對象が交換價值に在りて使用價值に在らざること、從て一部の學者の如くリ氏が勞働と並べて效用を價值決定の一要素となしたりと解するは全然是認し難きことを明かにし——筆者は此點は全く著者の言の如しと言ひたい——第二章に於てはリ氏價值論の妥當限界は場所的には單に「原始社會にのみ妥當すべきであるとしたのではなくして、それは總ゆる社會を通じて(彼に於てはそれが永久的なる唯一の社會即ち資本家社會として現はれてゐるのであるが)妥當すべきであるとしたのである」物的には任意可増性の貨物について妥當するのである。而してリ氏が其の價值法則を斯の如く任意可増性貨物に限定したる點は獨逸歴史學派奧太利學派の多くの者が非難する所であるが、是は「決して彼の價值論の缺點ではなく寧ろ其長所である」と言はねばならぬ。交換の對象物たる貨物を全

部的に漏れなく包括し其交換價值如何をたづねんとするは決して現今の歴史的なる生産關係の、從つて又商品價值の本質を闡明する所以ではない」と極論して居らるゝのである。而して著者の是等の議論はリ氏の價值論は場所的には原始社會にのみ妥當し他の社會には妥當せぬといふ議論を反駁し物的には任意不可増性貨物を除外せるは其妥當の範圍を著しく局限せるものなりと爲す非難を是正する點から見れば甚だ尤もと筆者にも考へらるゝのであるが(イ)物的に妥當する範圍を斯く局限せるは却つて長所なりとせらるゝ點は法則は妥當の範圍が普遍的なればなる程愈々可なりといふ自明の理までも拒否せられたるものであつて此は一方の極端に陥られたるものではあるまいか(ロ)リ氏が自己の價值論は總ゆる社會を通じて妥當すると爲したるは誠に著者の言ふが如くであるが其社會はリ氏に在りては永久的なる資本家的社會として現はれて居ると言はるゝは筆者には全く失當と思はるゝのである。仔細はリ氏の思念しつゝありし社會は生産資本——寧ろ生産手段——の使用せられつゝある社會であつて所謂資本家的社會ではないからである。而して是を斯く解す可き理由は(1)リ氏の資本の定義に徴し(2)リ氏に従へば原始の社會にも既に資本あるに徴し(3)著者が九七頁—九八頁に於て資本主義的社會彼にありては原始社會を含むとして此事を誣りながら承認せられ居るに徴し(4)否更に進んでは「リカアドは生産關係の歴史的発展を意識することなく彼にありては原始社會に於て既に分業があり階級の區別があり私有財産資本があり自由契約處分自由競争などが前提せられて居る」としてリ氏を非難しつゝあるゝに徴して容易に之を知ることが出来るからである。而して一度此點を考慮に加へてリ氏の價值論を檢覈せらるゝならば其は自ら違つた光彩を放つ點甚だ多からうと自分は私かに想像しつゝあるのである。

却説乍併斯は筆者の評言であるから是非は一に讀者の判斷に俟つとして再び紹介に歸れば著者は第三章に於てリ氏が費消勞働價值説をこりたることを擧げ「而してリカアドがかく費消勞働と支配

労働との概念を分ち費消労働を以て交換価値決定の唯一の標準としたることは彼が労働力の価値と労働の分量との二つの概念を分別し貨物の交換価値は労働力の価値に依りて決定せられず労働の分量に依りて決定せらるゝものであり、且つ前者は後者より小であることを認識せるに由るものであると説き第四章に於ては「貨物の交換価値はそれが生産に費されたる労働の分量により決定測量せらるゝ」と云ふ命題に於てリカドは此価値形成労働を如何に規定するところがあつたであらうかと云ふ問題を提出し労働を価値の質的規制者としての労働と量的規制者としての労働との二つに分ち前者に關聯してはリカドオは労働の單位を認めたるが其單位の本質を把握するに至らなかつたことを指摘して茲に彼の價值論の未熟なる一因在りとなし後者に關聯してはリ氏が價值論の規制者として認めたるは平均労働分量なりと爲す説と最大労働分量なりと爲す説との二つありとして之を紹介したる後に自らの斷案として前者は價值決定の一般的規定であり後者は其具體的に實現せらるゝ規定の一つの場合であると解答して居らるゝやうである。

猶ほ著者は第五章に於て直接労働と間接労働を第六章に於て相對價值と眞實(絶對)價值を第七章に於て價值の實體と尺度とを論究して居らるゝが、而して是等の諸章特に最後の章の議論は大に賛成を表せんとする所であるが其紹介は茲には之を割愛することゝして、以下第二篇に就て其大要を言へば著者はリカドオの擧げたる固定資本流動資本の區別は其自體に於て缺陷あるのみならず他方に於て不變資本可變資本の區別としても頗る不十分なるものである。彼の價值論の修正は茲に萌芽し、彼の利潤論は茲に發生しその價值論は終に其本體より離れんとするに至つたのであると斯う云ふ見地より所謂リカドオ價值論の内容に立入つて討究せらるゝのであつて其目的の爲めに主題を利潤の相對價值に及ぼす影響と勞賃の相對價值に及ぼす影響とに分ちリカドオの言を引いて詳細に説明し、最後にリ氏は此修正に依りて彼の價值説を放棄するに至りたるものであらうか否か或

者はリ氏は此修正に依りて費消労働の外に利潤をも明らかに價值構成要素として認むるに至つたものであるから修正は眞に修正なりと爲すが併し労働價值説に理解あるものはリ氏は利潤を相對價值變動の獨立の一要素として認めんとしたるは事實ではあるが彼の労働價值説の本質及び所謂修正の内容は利潤を労働價值より説明す可く已に大體に於て可なり十分なる程度に於て構成せられてゐた、たゞ彼は一步を進めて利潤を斯の如く餘剩價值として意識的に説明するに至らなかつたに過ぎないと解するのである、自分は此後者に從ふとして自己の態度を表明して居らるゝ。筆者は著者の此表明に對しては是非を云爲す可き地位に置かれてあらぬから沈黙するの外はないが、リ氏は是等の修正の後に於ても労働價值説を守らんとしたる其形跡は彼の「原論」を讀む者の否定し得ぬ所であるから彼の原論を基礎として議論を立つる限りに於ては著者の此表明に賛成せざるを得ないであらうと思ふ。併し問題は「原論」以外に在りとも云ひ得るのであつて此點は實は筆者の迷ひつゝある所たるのである。

第三篇及び結論の所説に就ては筆者は別に其機會と其人ある可きを思ふて一切觸れぬこととする深く著者と讀者の諒解を請はんとする所である。妄評多罪

(三邊金藏)

理財學會記事 二月九日午後三時より舊演說館に於て理財學會例會を開く。唯物史觀の先驅者なる演題の下に平井教授の講演あり。閉會後萬來舎に於て晚餐會を開く出席者は平井教授並びに二年幹事小林、奥田、野村、武井、血脇、一年幹事、森、塚本、内田、細居、久野にて歡談、數刻八時散會す。